Renounce: A Study of Buddhism and Polity in Thailand against a Historical Background. Cambridge: Cambridge University Press.
Wolters, O. W. 1999. *History, Culture and Region in Southeast Asian Perspectives*. Ithaca: Cornell University. (Revised Edition.)
アンダーソン，ベネディクト．2007.『定本　想像の共同体ーナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳，書籍工房早山.
水谷康弘．2005.「タイ近代国家の蹉跌ー人民党政権による警察改革の試みをめぐって」『東南アジア研究』43(2): 191–209.

堀江未央.『娘たちのいない村ーヨメ不足の連鎖をめぐる雲南ラフの民族誌』京都大学学術出版会，2018 年，354 p.

綾部真雄 *

本書は，中国雲南省ラフ女性の遠隔地への婚出をめぐる良質なエスノグラフィである．地に足のついた，そして良心的な調査を実施してきたことが文章の端々からうかがえる．見てきたもの，聞いてきたことを文字に起こす前に，一度立ち止まって，違う角度から光をあて直す作業にも手間を惜しんでいない．先行研究における自論の布置の仕方にも工夫がある．通常，女性のマイグレーションをめぐる議論は，移住先での女性の生き方に焦点を当てることが多い．それに対して筆者は，あえて「送り出し側」，すなわち女性たちの出身村落に身を置き，そこで生じている「若い女性の不在」が，人々の意識と語りに何をもたらすかを緻密に描き出すことを試みている．新鮮な手法である．また，遠隔地に嫁いだ女性たちのもとを訪れての聞き取りにも一定期間従事しており，結果として本書にマルチサイテッド・エスノグラフィとしての側面をもたせてもいる．

近年の人類学は，一次資料を後景化させ，思弁的な議論により比重を置くようになった感がある．「フィールド」とされてきたものの端っこが世界に溶けこみ，境界がみえにくくなるなかでの必然的な変化ではあるが，依拠しうるスタンダードの不在に，そこはかとない不安を抱えている人類学者も少なくない．そうしたなか本書は，ふんだんな一次資料を用いながらも，平板なファクトの羅列には終始せず，そこに巧みに最新の学術的課題や視点を織り込む姿勢をみせている．後述するように，理論面で若干の課題を残すようには見受けられるものの，今日的なエスノグラフィの書き方のひとつの範がここにあるといってよい．

ここでいったん，本書の内容を概観する．

本書が対象とするのは，中国西南部に位置する雲南省の少数民族であるラフの村落における「若い女性の不在」と，その事実をめぐる村民らの語りである．現在，ラフの若い女性の多くは山東省，浙江省，江蘇省といった遠隔地に婚出しており，山間部の村落では非常にいびつな人口構成が生じている．通常のエスノグラフィであれば，婚出先の女性に焦点を当て，彼女たちの行動原理や価値の変化を追うところであるが，著者はあえて女性らの出身村でフィールドワークを実施し，空洞化した村を生きる人々の言葉の端々から，実

* 首都大学東京人文科学研究科

際にはそこにはいない女性たちの輪郭を描き出すという手法をとる．

序論的な位置づけの「若い女性はどこ？」では，まず著者のスタンスが明確に示される．「女性を被害者と見なして婚姻移動の問題を指摘し，女性の脆弱性を改善するための提言を行う立場には立たない．かといって，女性の移動を女性の主体性発揮の契機である，と積極的に評価もしない」（p. 5）．すなわち，近年の公共人類学にみられるような学問成果の応用や還元の動きとも距離を置き，フェミニスト人類学が唱道する女性の主体性の再評価の流れにも与せず，眼前で生起するさまざまな事柄について「ローカルな人々の眼差しから眺めてみること」に徹する姿勢をまず打ち出している．こうした中庸を行くスタンスが，本書を貫く通奏低音ともなっている．

第 1 章（女性が流出する社会）は，事例の提示にさきがけ，「女性の流出」という現象にまつわる先行研究を俯瞰すると同時に，そこに「エスノ・エージェンシー」概念を導入することの論理的必然性を説くという構成をとっている．いわゆる「メールオーダーブライド」として中国からアメリカに嫁いだ女性には，沿岸部を中心とした大都市出身者が多かったのに対し，その後背地にある農村の女性たちは，そうした都市部へ「打工妹（出稼ぎ娘）」として働きに出る．ラフ女性による遠隔地婚出は，このような後背地の農村におけるヨメ不足を補う側面をもつという．ラフ語で「ヘパとポイする」（「漢族と逃げる」の意）と表されることもあるこの事象をめぐり，著者は大別して 2 つの新機軸をここに持ち込もうとしている．ひとつは，先にも触れたように，女性を送り出す側の社会に関する視座の不足を埋めるという試みである．いまひとつは，女性のあり方をめぐって頻用される行為主体性／エージェンシーが，「たんに行為を主導する能動的存在として描かれがちである点」をめぐる批判的考察である．女性たちのエージェンシーを，婚出する個々人の能動性を体現したものとしてではなく，送り出し側と婚出する女性たちとの「不断の相互行為の積み重ね」のなかで「揺れ動く」より関係論的なもの（＝エスノ・エージェンシー）として捉え直す姿勢といってもよい．なお，エスノ・エージェンシーにおける「エスノ」とは「エスニック」をパラフレーズしたものではなく，エスノメソドロジーにおけるそれと同様の「人々の」といった意味をもつ．

第 2 章（ラフ村落の空間秩序と婚姻慣行）は，雲南省のラフに関する民族誌的諸事実とその現代的変動をコンパクトに整理したものであり，ここでは詳細は割愛する．ただ，本書全体に関わる議論との関連でいえば，親族関係と結婚について述べている第 3 節が重要な位置づけにある．なかでも「村や家の外で形作られる未婚男女の関係性を村内に持ち込むのが結婚＝『夫を求める／妻を求める』という契機である」（p. 103）という説明は興味深い．ラフ社会では未婚の男女が性関係をもつことが相対的に多いようであるが，一方で，そうした規範の逸脱を正す契機としての儀礼と儀礼によって取り結ばれた関係がも

たらす縛りは相応に重く，離婚は困難であるという．遠隔地婚出は，そこから来るストレスの延長線上にあるという現地での「語り」すらあるという．

第 3 章（遠隔地婚出の登場と変遷）では，男女別の省外分布状況など，ラフの人口動態の変化が具体的な統計的データを伴って紹介されている．統計をみる限りにおいては，ラフ女性の分布が漢族の農村が多い山東省や河南省などに集中していることが一目瞭然である．後半部では，ラフ女性の遠隔地婚出がどのような仲介者を通じて実現し，また婚出したラフ女性たち自身がどのようなネットワークを構築しているかが示される．女性たちによる婚出先での暮らしに関する（多くの場合）肯定的な語りが，さらなる婚出の呼び水となっていることもうかがえる．

第 4 章（遠隔地婚出をめぐる村人たちの語り）では，ラフ女性の遠隔地婚出をめぐる 13 の事例（語り）が時系列で提示される．著者のフィールドワークを追体験し，事例の臨場感を“楽しむ”という意味では，本章が本書全体のハイライトであるともいえる．本人不在のまま，村人たちの語りのみによっての婚出女性たちの人物像が次第に輪郭を取り始めるところに，著者のナラティブを再構成する技量を感じる．「不可解な移動を理解可能にするための様々なストーリーが試みられるが，それらの解釈は常にひとつの像を結ぶわけではなく，多声的に投げ出されたままのように見える」（p. 192）という言葉からもうかがえるように，著者はこれらの語りを強引に一般化することはしない．人々の行動は，「誰かの主体的選択によってのみ起こることはあり得ず，様々な状況や他者との関りのなかで生起するもの」（p. 192）だからである．著者はこのことに鑑み，ストラザーンを引きつつ，ラフ女性たちの「人格（パーソンフッド）」を社会的な環境から切り離された独立性をもったものとして扱うことの限界についても一定の紙幅を割いて論じている．

第 5 章（逡巡するラフ女性たち）では，一転，遠隔地婚出を行なった女性たちに関する 7 つの事例が紹介される．漢族男性と結婚したこれらの女性たちは，婚出先で常に幸せな生活を送っているとは限らず，さまざまな事件に遭遇し，さまざまな感情を内に秘める．特に故郷への里帰りは，一部の女性にとって，順風満帆とはいえないこともある婚出先での生活を相対化し，自身のアイデンティティを再確認する契機ともなる．「逡巡」とは，一度は故郷と距離を置いた女性たちが，虚飾や虚勢を捨て去って原点に回帰しようとする際に生じる感情であるようにみえる．

第 6 章（女性の属する家はどこか）は，現代のラフ女性にとっての「家」への帰属が，儀礼的帰属と法的・制度的帰属との間で揺れるハイブリッド性をもつことを描き出した挑戦的な章である．ラフの招魂儀礼において「身体の魂」を呼び戻すためには，いったんそれを「炉の魂」が属す屋内の炉に招き入れ，そこから本人の身体に結び付け直すプロセスが必要となる．ある特定の人物の「身体の魂」は，その人物が帰属する家の「炉」を通じてしか呼び戻せない．したがって，婚出

した女性の招魂は，理論上生家では行なえないのである．しかし，本章の事例にみるように，実際には婚出後も母親が娘の魂を生家に呼び戻す儀礼を実施することがあり，理論上の整合性よりも親子のつながりが重視されることも少なくない．一方，女性の法的・制度的な帰属や立場は，結婚後に夫側の戸籍に入るか従来の戸籍を残すか，結婚証をどの段階で作成するか等によって大きく変わってくる．こうした状況を受け，著者は，近年のラフ社会におけるオリ（秩序）は，儀礼的帰属の原則と法的・制度的な帰属の原則とが不可分に混在したかたちで成立しているという見立てを示す．そして，それらの配置に明確な規則が存在しない以上，女性の帰属性（所在）は常に交渉の余地を残したものとなるという．

第7章（結論　移動する女性の所在と主体）は，ここまでの議論を1）エスノ・エージェンシー論，2）その土台としての人格観念，3）人格観念と家との結び付き，および，そこに新たに組み込まれつつある行政書類の存在，の3つの観点から振り返り直すかたちをとっている．エスノ・エージェンシーを「行為を解釈する視点をその社会の人々に据え，人のあり方や人格観念との関わりから人の相互交渉を捉える手法」（p. 316）として簡潔に位置づけ直すといった工夫はみられるものの，基本的には既出の議論の厚みを加えた再整理が主眼となった章であり，結論まで取っておいた「隠し玉」は特に無いように見受けられる．

以下，評者なりに本書を総括してみたい．まず，冒頭でも述べたように，本書が豊富な一次資料と新たな視点をもった良書であることは論を俟たない．特に，女性たちを「送り出す側」の社会にあえて焦点を当て既存の議論を補完しようとする姿勢，女性の主体性と能動性とが互換的に捉えられがちな風潮への違和感を議論の出発点にしている点，などについては強く共感する．今後本書が，広義のマイグレーションや女性の婚姻移動，なかでも，中国雲南省における同様の事象の研究を志す人々にとっての必携書になりうる可能性も十分にあろう．一方で，全体を通読した後にある種の消化不良感が残ったのも事実である．2つの点を指摘しておきたい．

ひとつは，本書の魅力的な諸事例を整理するうえで，「エスノ・エージェンシー」論という理論的枠組み，あるいは（著者がいうところの）手法は本当に必要であったかという根本的な点である．同論は，従来の視点の相対化を一定程度促すものではあっても，新たな議論の提出といえる次元には達していないのではないか．論理の破綻こそないものの，それは「エスノ・エージェンシー」が非常に間口の広い概念として設定されているからであり，任意の女性のエージェンシーが在地の人間関係や社会的文脈に依存するものであるというのは人類学的に既知のことではなかったか．著者も引いているストラザーンのパーソンフッド（人格）やディヴィジュアル（分人）の考え方を超える，もしくは補完しうるだけの視点はどの程度あるのか．こうした疑問が頭をよぎる．

相応に厚みのある事例や一次資料が手元に

あるものの，整理の方向性が定まっていないとき，複数のランダムな既発表論文を一本化して理論的文脈を与え直すときなどに，当初から想定していたわけではない視点や枠組みを事後的に嵌め込むことは少なくない．そして，一貫性や整合性が損なわれていない限りにおいて，そのこと自体が批判される必要もない．しかしながら，そうした“手術”の痕を完全には隠しきれず，作為が僅かにでも透けてみえるとき，読者はそこに引っ掛かりを覚える．本書がそのようなケースにあたるのかどうかは分からない．ただ，その感触を完全には払拭できなかった．

2 つ目は，本書の中核をなす視点が，ラフという民族を通じて示されることの必然性をめぐるものである．すなわち，本書で取り上げている遠隔地婚出という現象が，どの程度までラフに特有なものであるのか，あるいは，雲南省および隣接諸省の少数民族のなかでどの程度まで一般化できるものであるかという点についてである．本書ではこの点にほとんど触れていないため，読み進めるうちに，次第に霞みのようなものが思考を遮るようになっていった．少なくとも評者は，これほど多くの少数民族女性が後背地の漢族農村に婚出しているケースを本書以外で目にしたことがない．経済格差に基づく非対称的な婚姻関係を，時にローカルに時にグローバルに取り結ぶことがあるのはどの民族にも共通することであろう．だが，これほど明白で連鎖的な人口移動が起きている背景には，ラフの女性たちが置かれた状況と後背地の漢族農村との間に，単なる偶然を超えたなんらかの親和性（のようなもの）が存在していると考えるのが妥当であるようにも思える．評者は，雲南省で本格的なフィールドワークを実施したことこそないが，少なくとも，過去に数回訪れたことのある雲南省のリス村落において同様の現象が起こっているという話を耳にすることはついぞなかった．

遠隔地婚出をラフ社会ならではの特質として議論することの困難は承知している．それは，プッシュ要因とプル要因の相関をある程度強引に同定すること，本質主義の誹りを受ける可能性を残しつつ「ラフらしさ」を抽出すること抜きには，おそらく成立しえないからである．だが，本書もまたラフ社会をいささか脱文脈的に浮き上がらせることにより，結果的に「ラフらしさ」の再生産に携わっているともいえなくもない．であれば，むしろそのことを逆手に取り，「ラフらしさ」をより広い文脈に位置づけ直す試みがあってもよかったように思える．確かに本書は，漢族社会と国家行政を大きなキャンバスに据えたエスノグラフィになってはいるが，他方，ラフの人々が生きる直近の地政学的・生態学的文脈としての雲南省やゾミア（およびそこに住むさまざまな民族）が後景化しがちである部分は否めない．たとえば，遠隔地婚出をめぐる隣接諸民族との相対的な差異を多少なりとも描き込むことで，分析にさらなる奥行きをもたせることができたのではないだろうか．単純な比較はできないものの，民族誌的なデータの蓄積が最も進んでいるタイのラフに関する研究を，もう少し有効に引き合いに出すこともできたかもしれない．

こうして後出しじゃんけんで議論の陥穽を探してはいるが，これだけの書を世に問うた著者のエスノグラファーとしての手腕は掛け値なしに賞賛に値する．一同業者として，ここに投下したであろう時間と労力がいかに大きなものであったかは容易に想像がつく．人類学者が著すエスノグラフィやモノグラフは，実に高い頁単価と単独性に裏打ちされたものだとつくづく感じる．こんなことを考えていると，ついつい批判の矛先も鈍る．

高倉浩樹編.『寒冷アジアの文化生態史』（シリーズ　東北アジアの社会と環境）古今書院，2018 年，130 p.

田中利和 *

アフリカを起源とする人類は寒冷アジアに進出し，どのように生きぬいてきたのであろうか．この寒冷地域には，ミクロな観点に立つと，他地域における従来の生業の研究成果だけでは十分に理解できない社会が存在する．たとえば，牧畜と漁撈が同時におこなわれることや，狩猟採集民が定住化し階層社会をつくる点である．本書は，寒冷という生態環境を背景とした北アジアの狩猟採集民や牧畜民の歴史を，環境と文化の相互作用として読み解き，個々の社会組織にみられる環境適応の柔軟性と脆弱性を明らかにするものである．

本書は 5 人の執筆者による 5 章の構成であり，考古学および民族誌的観察に依拠しながら，局所的な自然環境のなかで展開した個別の生業の複合に着目し，これを適応ないし進化という観点から分析したものである．各章は個別にも読めるし，全体の流れに沿うのもよい．なお，これらの論考は 2015 年 12 月 5 日 6 日に仙台でおこなわれた東北大学東北アジア研究センター20 周年記念シンポジウム「東北アジア―地域研究の新たなパラダイム」のセッション「東北アジアの人類誌と環境適応」がもとになっている．内容をみていこう．

第 1 章「北東ユーラシアにおける人類の最寒冷期への適応」は先史考古学を専門とする鹿又喜隆によって執筆されている．寒冷北アジアの環境と技術の関係を旧石器時代の人類史の総説的な内容を含めながら，シベリアが起源と推測される石器の代表例である「細石刃（さいせきじん）」に焦点をあてて議論をしている．細石刃は，骨角製の槍先や銛先の側縁に彫られた溝に並べて嵌め込まれた道具である．最寒冷期に細石刃を有した集団が活発な活動を開始したことで，中国北部や韓半島，北海道まで，細石刃石器群は急速に拡散していった．これはツンドラステップとそこで生息する動物群の南下によるものと考えられ，この広域拡散は環境変動にともなう人類の長距離移動の証拠としてみることができる．晩氷期に入り急激な温暖化現象にみまわれると，日本列島はじめ北東ユーラシア沿岸部では細石刃石器群が広域にわたり消滅するが，対照的に，カムチャッカやアラスカの遺跡の調査からはそれらが存続したことがわかっている．細石刃技術は人類の寒冷地適応

* 東北大学東北アジア研究センター